

# 「京城日報」における日本語文学：文芸欄・連載小説の変遷に関する実証的研究

巖, 基権

<https://doi.org/10.15017/1543916>

---

出版情報：九州大学, 2015, 博士（比較社会文化）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名 : 嚴 基 權

論 文 名 : 「京城日報」における日本語文学  
一文芸欄・連載小説の変遷に関する実証的研究一

区 分 : 甲

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は植民地時代に「外地」の朝鮮で発行された日本語新聞「京城日報」における文芸活動について実証的に考察するものである。

「京城日報」は明治 39 年に当時の初代統監である伊藤博文によって朝鮮で創刊された。「京城日報」は最初、日本語とハングルで発行されたが、創刊から約 1 年後の明治 40 年 9 月 21 日にはハングル版の発行が中止となり、日本語版だけが見られるようになる。こうした「京城日報」に関する研究は少なく、本格的な研究書としては、鄭晉錫の『言論朝鮮総督府』（コミュニケーションブックス、平成 17 年 5 月 6 日、ソウル）や李相哲の『朝鮮における日本人経営新聞の歴史』（角川学芸出版、平成 21 年 2 月 28 日）を見るのみである。これらは主に経営者たちや朝鮮総督府との関係などの京城日報社の社史に関する研究にその重点が置かれている。論者はこのような「京城日報」に関する先行研究を踏まえた上で、これまでほとんど注目されてこなかった「京城日報」における文芸活動に焦点を当てる。

日本における旧植民地地域の文芸に関する研究は 1990 年代に入ってから本格的に行われた。一方、韓国でも 2000 年代に入ってから、これまでは「親日文学」として見られてきた「日本語文学」を、「二重言語文学」という観点から捉え直す傾向から「日本語文学」研究が盛んに行われてきた。しかし、それにもかかわらず、鄭柄浩は日本では朝鮮に行った経験のある日本人作家たちや渡日作家たちに関する研究が主に行われており、韓国でも著名な作家の日本語文学の研究に偏っているとし、未だに「一国中心的な国文学研究」から脱していないと指摘している。植民地朝鮮で発行されていた「京城日報」における文芸活動も、それが「日本文学」なのか「韓国文学」なのかという一国中心の観点からとられて過ぎたあまり、これまで日韓両国の文学研究から除外されてきたのである。鄭柄浩が述べているように、現在の植民地日本語文学の限界を乗り越え、「韓半島植民地〈日本語文学〉の全体像」を明らかにするためにも、「京城日報」という「研究の空白」を埋める必要性が問われていると思われる。

本論文はこのような問題を確認した上で、植民地時代に「外地」の朝鮮で発行された日本語新聞「京城日報」における文芸活動について考察する。特に文芸欄と小説などの連載物に注目し、日本語文学が「京城日報」というメディアを通して植民地朝鮮でどのように展開されてきたのかの見取り図を描いてみる。その基本的な作業としては近年出版された復刻版『京城日報』の 1 巻から 191 巻までに掲載された文芸関連記事をデータベース化し、連載されていた作品の目次を作成する。その調査の結果としては、「京城日報」の文芸記事や連載物の執筆者は主に「内地」の日本人が担当しており、その中には著名な作家も作品を寄せていることがわかる。特に毎日紙面を飾っていた長編連載物の場合、昭和 17 年に漸く朝鮮出身作家が作品を寄せるまで、日本人作家が作品の執筆を受け持っていた。ところが、文芸記事の方に目を向けると、長

(比甲様式 6)

編連載物の場合とは少し様子が違って、かなり早い時期から朝鮮人作家の執筆が行われていた。それは前述したように韓国の「二重言語文学」研究が著名な作家の作品、その中でも主に日中戦争以後の作品研究に偏っていることに対して、改めて 1910 年・1920 年代の日本語新聞や雑誌における文芸の「研究の空白」の存在を想起させる。

本論文はこのような課題に答えるため、構成は大きく二部に分かれている。第一部「『京城日報』における文芸欄と連載小説・講談の変遷」では、復刻版『京城日報』を主なテキストとし、敗戦による廃刊までの「文芸欄」の変遷について概観する。また、連載小説や講談のような連載物の目録を作成し、作品の転載の問題について考察を行う。第 1 章「『京城日報』における文芸欄の形成—その成立と役割を中心に」では復刻版『京城日報』収録の大正 4 年から廃刊の昭和 20 年までの文芸欄を担当していた編集人やその変遷について概観する。紙面の構成や作品を寄せた作者などを表でまとめながら、最終的には文芸欄の役割について考える。第 2 章「『京城日報』における連載小説と講談」では、毎日紙面を飾っていた連載小説と講談の目録を作成し、今までの「日本文学史」から漏れている新資料の紹介と共に、その事例として林芙美子と久生十蘭の作品を取り上げ、作品の転載について解説を行う。

第二部「『京城日報』をめぐる文学者と作品の移動」では、作品が「京城日報」の紙面に掲載される過程を、「脚色」、「人脈」、「移動」、「検閲」、「大衆小説」といった多様なキーワードで探ってみる。第 3 章「脚色・挿入される関東大震災—上司小剣「災後の恋」論」では、「京城日報」に連載された上司小剣の「災後の恋」を取り上げ、内地の新聞に連載されていた「東京」という長編小説と比較しながら、同じ内容が外地の朝鮮のメディアではどのように脚色されたのかについて考察する。第 4 章「『京城日報』における芥川龍之介の「提灯文」をめぐる—宮崎光男との親交を中心に」では「京城日報」に友人の宮崎光男のために、作品の推薦文を書いた芥川の文章に注目し、戦後あまり注目されてこなかった宮崎光男と芥川龍之介や菊池寛などといった文壇人たちの親交を明らかにする。第 5 章「菊池寛たちの昭和五年の朝鮮旅行をめぐる—講演会で愚痴をこぼす文学者」では、昭和 5 年に、満洲に行く途中で京城に 1 泊 2 日の滞在をしながら講演会などを開いた菊池寛たちの動向に注目する。「京城日報」がそれをどのように報道し、また他の朝鮮のメディアがそれをどのように見ていたのかを比較・対照しながら、京城日报社が「内地」の文壇人たちを招待した狙いや、その後の関係についても考察を加える。第 6 章「『京城日報』における検閲の問題—佐藤春夫の「律義者」を中心に」では佐藤春夫の「律義者」という短編小説を取り上げ、内地で検閲を受けた作品が外地ではそのまま掲載されることになる一連のプロセスについて考える。第 7 章「『京城日報』における大衆小説の成立と変遷—朝鮮文人協会の改革と『国民文学』をめぐる」では朝鮮出身としては初めて「京城日報」に連載小説を掲載することになる李石薫の「永遠の女」に焦点を当てる。その際のキャッチフレーズの「大衆小説」に注目し、「京城日報」における大衆小説の動きを概観しながら、戦時中にその概念がどのように変容していったのかを探る。